

# 魔法と少女と波導使い と……

メカ樹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自称一般人？な高校生の主人公は、いつの間にかお亡くなりになっていたらしい。しかし、

一部の記憶だけが全然思い出せなかった。そんな主人公の前に白い装束を纏った神々しい御方（まあ、想像できるほど分かりやすいけど）が現れた。その御方と有意義なO☆H A ☆N A ☆

SI……………、をしました。さつそく特典決めになったが、どうにも後二つの特典が決まらなかったのでもくじ引きで決めることに。そして、くじに書いてあった片方には……  
「波導の…力☒」

これは、とある男の愛と

(あつたらいいね) 勇気の (頑張りなさい) ∴物語

\*処女作です。至らない所もありますが面白くしていこう頑張りますので、どうか温かい目で応援してください。これからよろしくお願いします。

\*旧：魔法と少女と波動使いと……

# 目

# 次

プロローグ 3  
プロローグ 2  
プロローグ 1

プロローグ 3	プロローグ 2	プロローグ 1
—	—	—

24 4 1

# プロローグ 1

「ZZZZ……つうう」

さて、もう朝だと思うので目覚めるとしようかなつと瞼を開けると……この世のとは思えないほど真つつつ白な天井だった。

「ああ、知っている天井だ」

OK、ふざけるはやめるから、そんな心を払うような視線を向けないで下さい。胃が  
キリキリ

痛みますから。

「よいしょっと」

立ち上がり周りを見てみれば、上下前後左右とも白の風景が広がっている。どうにも  
これは



電話番号が分かってはいるが今はどうでもいいでしょ

性別ニューカマー新人類……ジャナイ！おとし漢だあー！\*普通の男です

e c t ……

変な問もあつたが、結果的には名前と友達のことが分からなかった。しかし、友達のことが思ひ出せないというか、もしかして友達自体がないなんてオチはないよな。

「ま、まさかな、そんな寂しい奴なわけないよな…俺？」

そんなことに若干orzになっていると…

「何だ、起きたのか、人間」

前にある白い景色が割れて、中から白髪白髭のおじいさんが威圧感を出しながら現れた。

## プロローグ2

「何だ、起きたのか、人間」

はい、前回の話でおじいさんが空間を裂いて出てきたので固まっているこの作品の主人公です。

イヤイヤ、いい加減名前を出せと言われてもねー  
思い出せないもんは思  
い出せないって言つとるだろーに。

まあ、それはともかく。読者のみんなゴメンなー

前書きにもある通り作者が中途半端な所で終わらして：

これでも作者は一応学生で、こんなことも偶にあるかもしれないが、  
悪く思わないでくれると俺も嬉しいな。

というより、俺って優しくね？

よく他の作品には自身の作者を罵倒している先輩方がいるが、俺はそんなことはしないよ。  
作者あつての主人公俺だからね！

「何 くだらないことを 考えている 人間」

うん、やっぱり目の前のおじいさんは神様らしいね。  
今まで心の中で喋りまくっていたことが聞こえたようだし……  
そんなことが無くてもこの威圧感だけでも十分ツス。  
お腹いっぱいだよ

それにしても……………

「ジロジロ見るな 人間 虫唾が走る」

「何でこんな不機嫌なんだ!!」

そうなのだ： ナ ゼ カ 神様が苛立っている。

俺ってばなんか怒らすようなことでもしましたかね〜!!

ン ガ タ エ ダ チ イ ユ マ ウ……………カ

もしかして、アレか？

よく二次創作にもあるように上司や部下がへマをやらかしたので、

その尻拭い的なアレか？

まあ、それだつたらしようがn「儂がお前を殺したのじやよ 人間」

……………っは？

今

何と？

「聴き覚えが悪い猿じやのう

儂がお前を殺した

もう言わんぞ

猿」

主人公は人間から猿にランクダウンしました

いや、ちよい待て!!

仲間の尻拭いでもなく、普通にこの神に殺されたのか!!

それだったらちよつとでもいいから謝るんじゃないかな!!

「はあー 何故、猿風情この儂が謝罪せねばならぬのじあ」

はい☒

「人間なんて そこらへんにあるゴミと同じじゃないかのう」

.....ピクン

「さて、せっかく神である儂に会ったのじゃ。

「転生させてやるから崇めよ？」

ビキリ!!!  
.....

「後、ちゃんと儂の神々しさとか伝えられんのか

「ゴミカス」

駄作者があ」

プツチン!!!……………↑作者です

「なあゝ俺つてさあゝケンカ嫌いなんだけどさあゝ……………しばき倒してい

いよね☆」

作「イヤイヤ、その顔はケンカ好きだろゝ……………そのこと虚に関しては賛成だ☆」

「な……………えっ?」

そこには、神様なんて崇めない清々しい笑顔の二人がいた。

\*何げに一人余分なものが混じっていますが、深くつつこまないのが………優しさです。

「ちよつ……ちヨットm!!」

「さあ。久方ぶりの」

「楽しい　　楽しい」

「OSHANA☆SHI☆だ」

「あつ………」



いい汗かいたなー

まったく、有意義な（主人公と作者だけの）時間だったな。

「……………」ブルブルブル

なんか端っこで震えているじいさんがいるが気にしな〜い 気にしな〜い

ーそろそろ本題に行こっかなー

「おい、じいさん。聞きたいことがあるんだけど」

「はっ……………ハイ!!」

「何で、俺の名前と友人関係の記憶がないんだ？」

もしかしたら原因が分かるかもしれないからな…一応聞いて見ることにした。

「それはのう、死んだ時のショックで思い出せないのじゃよ」

「あゝ そんじゃ思い出せないのか？」

「いや、思い出せるぞ」

えっ？マジすか？

「本当じゃとも。神に誓ってもいいぞ」

あんた自身が神でしように……

「でっ、どうすんの？」

「これを使うのじゃ……よつと」

じいさんが何もない空間からあるものを出した……

いや、

あれって……

ソールイーオーの死〇様の手じやーん♪

「マテマテマテ!! それをどうすんの?!」

「これでお主の頭をスパーンつと…」

「絶対スパーンじゃ収まらないよね!! ドコーンくらいまで行きますよ!!」

「ええい! 覚悟ー!ー!ー!ー!ー!」

「さっきのことまだ根に持っているのかー!」

「死〜〜神〜〜チョー〜プウー!ー!ー!ー!ー!」

「あんた神様だよなー!ー!」



く数分経過く

はあー……痛かった……

(あんな音がしたのに痛かっただけで済むなんて、お前本当に一般人か？  
作者)

なんか聞こえるが……まあ、いつか！

ああ、そうそう。

やつと思いついたよ、名前。

俺は、せいどうりゆう聖道流波だ。

改めてよろしくな！

あり☒

「なあなあ、友達関係の記憶は？」

「それは……どうやら思い出せてないようじゃな？ 時間をかけて思い出すしかないじゃろうな」

はあくそうだな…… 今はいいか！

「じいさん、俺はもう転生する場所は決まっているのか？」

「うむ、お主の転生場所は………  
【魔法少女リリカルなのは】の世界じゃよ」

リリカルなのはって、特大魔砲を放つ魔王様がいるところだっけ？

うわー俺は生き残れるのだろうか……

「しかも、名前を知っているってだけでちよつとした知識しかないからな」

「ぐちぐち言つとらんで特典を決めてくれ。後、魔力はS+と決まっているからな」

「ああ、特典つてあるんだ。じゃあ何個までがいいんだ？」

「5個までじゃな」

「そうか…そんじゃあ……」

決まったことを整理すると、

① 身体能力UP

② 身につけた経験・技術が衰えない

③ 鍛えたり、努力をすればするほど力や魔力などが上がる（限界はない）

後

は

「むう~~~~~」

「これで10時間か…まあ決まんないのかのう」

そうは言ってもねー 白もやしやメルヘンホストの超能力とか、悪魔の実とか色々あ  
るのに簡単に

決められんわけないでしょ？

「はあくだったらくじ引きで決めたらどうじゃ？」

「くじ引き☒」

じいさんはまた空間から穴の空いた箱を出した。

これだったら踏ん切りがついていいか。

「さあ。2枚の紙を取るがよい」

「サアー 掴み取るぜー！」

♪ナニガデルカナ♪

♪ナニガデルカナ♪

♪ナニガデルカナ♪



.....ナニコレ？

「ほう、まさかそれをひくとはなあ〜」

波導つて言ったら俺が最初に思い浮かべるのは……

「お主が考えた通り、ル○リオの波導じゃ。それよりも使い勝手が良くて強力じゃがな。ついでに

言うとな影の力強くてなあ、どんな状況下でも影が存在しているぐらいじゃ

まあ、強いて言うとな…工夫すれば何でもできちゃうんじゃないかね？ということじゃ」  
「はあーそんな能力引いたのか俺はー」

そこは後で考えるとして……

「なあ、じいさん。ちよつくらお願いを聞いてくれないか？」

「内容によつてじゃな。して、願いととは？」

「此処で俺を鍛えてくれないか」

俺はいままで剣道や空手などの武道をやったことがない平凡な一般人だったので、いくら能力があっても戦いの基礎が成り立ってないと意味がないとおれは思っている。

俺は決して二次元の主人公のように、急に能力が身について戦ったこともないのに「勝っちゃいましたV」なんて主人公補正が付いてる訳がないしな。

「そんなことじゃったら別にかまわんぞ♪」

良かったちや良かったが、何でそんなに嬉しそうなんだ？

まあ、いつか！

「それでは師匠、お願いします」

「教えるのは儂じゃないんだが。それにもう始めるのか？」

「善は急げってやつだよ」

「ふむ、そうか…では、聖道 流波よ…修業開始じゃ!!」

オツシャーーーーー!!!

アゲテクゼーーーーー!!!

「火影に俺はなるっ  
「そこは海賊王じゃ!!  
!!!!!!!  
」

## プロローグ3

「お兄ちゃん…もう逝っちゃうんだね……」

「うん、字が違うけどもう行くよ」

聖道 流波は数多の試練を乗り越えて早一年、この神界から去ろうとしていた。ここにいるのはロングストレートの少しウエーブのかかった銀髪、透き通るような青色の瞳をした美少女が流波を見送ろうとしていた。

はい、一年間の修業風景の様子をかつ飛ばした聖道流波です。別に修業を見ているよりも先に進みました方がいいでしょ？

え？

そんなことは聞いてない？

さっきの女の子は誰だつて？

く  
く 時  
は  
戦  
国  
時  
d …… 終了

いつ誘拐したんだって？

ちなみにあのじいさんはどうなった？

うむ、それらの疑問を答えるには少し時を遡らなくてはいけないな……

では、その時の事件を プレイバックだ!!

チョットマツテクダサイヨ　ダンナ!!

次はふぎけないでちゃんと、ちゃんと話しますからね!! 火縄銃をこちらに向けないでー！ー！ー！！

コホン……それでは　テイク2いきます…

く半年前く

「ただいまく」

ここは色とりどりのお花畑に囲まれている一軒家という、実にファンシーな場所に俺、聖道　流波と何故かじいさんと一緒に住んでいる。

今日も修業が終わり家に帰ってきたのだが…

「お帰りなさい！　お兄ーちゃん♪」

そこには銀髪の美少女がいたそうなの……

「お兄ちゃん、ご飯にする？ お風呂にする？ それともくわ・t「言わせねーよ!!」……ぶう〜」

「可愛く不貞腐れてもいけません！ そういうことを無闇やたらに言っただけじゃありません！」

「やれやれ、「これは生涯お兄ちゃんの前でしかやらないよ〜」と言っていることは置いて……」

「……して？この女の子は一体誰だ？」

「エミだよ〜」

「アレ？ 俺は喋ってないからエミちゃんはあのじいさんと同じ神様かな？ あつ、そう

「言えばここに住んでいるはずのじいさん何処にいるか知らない？」

「エミだよ」

「い、いや、そういうわく」だ〜か〜ら〜」じゃ……うん？」

「そのおじいさんは変化へんげしたエミだよ」

H A I ?

じいさん＝エミちゃん？

Way?

イヤイヤイヤイヤ……

ドゥーユウーコトナノヨウー!!??

あつ、スワンスワン、今近くにボ○ちゃんが通つたんだ……つて違ーう!!

——この子何を言っているんだ——————!!!

詳しい詳細を望みたい!!とエミちゃんに突撃取材をかけようと思つたら……

「お兄ちゃん……あのね……／＼／＼」

モジモジと頬を紅く染めて少し俯き、視線を左右に漂いながらいじらしく言ってきた

……

ウワー……めっちゃ悶えますやん……

「はい……これ……／＼／＼」

まさか…プレゼントだと!!

俺は前世でも、女の子からプレゼントというのを貰ったことはない!…はずだ…

はず…と言うのは前世の友達のことを思い出そうとすると、白いモヤが掛かって見え  
ないんだよね

俺は思い老けて感激していた…

S M用の鞭を見るまでは…

えっ……………？

ああ、変わった形の縄跳びか…

「違うよ／＼／調教用の鞭だよ／＼／」

この時、俺は ブラックアウトならぬ ホワイトアウトした……………

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／  
 「それでねえ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／  
 ぺチンッ ぺチンって振るって欲しいのお／

俺は思考の奥底からマツハで駆け登った：

フウー、しゃーなしだな… そんなつぶらな瞳で懇願してくるならここは男を見せるため、鞭をしならせてふり……って、違う違うよ違いますよ!!

ナゼダ!! 何故エミちゃんはそんなアブナイ発言する!!

はっ……までよ……じいさん!! エミちゃんの方程式が成り立つのなら……

俺には心当たりが、少し……いや ビックバン級にありまくる……!!!

それはじいさんと一緒に住んでいることで必ず起こることなんだが、そのじいさんは年寄りの筈なのに年寄りらしからぬ イタズラをしてくるのだ。

ちよつとだけだったから見逃したのだが、日に日に エスカレートしていく イタズラ について堪忍袋の緒が切れました。

その時に影の力の制御と説教（という名のお仕置き）の一石二鳥をしていた。別に年寄りが影の鞭で叩かれているところを興奮するような変人じゃないので、高級耳栓で塞いで瞼を閉じて波導で周りを確認していましたよ。

だけどそのことがあったにも関わらず、イタズラをしていくからさあー、こつちも張り合ってたんだけど……

じいさんⅡエミちゃん

エミちゃんⅡじいさん

俺は……沈んだ……リアルに……

「みなさんと…同じ大地を歩こうとして…すみません…」

「お兄ちゃん!! しっかりしてー!!!」

アハハハ、このまま生きててもしやーなしだろ、俺? ああ、もう死んでいるんだっけ? だったらいつそ無になったほうがみなさんの幸せに繋がるのではないだろうか?

「お兄ちゃんが…お兄ちゃんが元気になってくれるなら…私は…」

僕は…君を傷つけたんだよ？なのに、僕の為にもつたないぐらいの涙目で向けて説得するなんて…君は…僕にとって…眩しすぎる太陽だ…

「拘束監禁プレイを受けるから…：／／／」

——ダメだ…死のう…

〳〳回想終了〳〳

いや〜一日中飲まず食わず凹んでたけどエミのおかげでなんとか立ち直ることができたよ。アノことについては考えないことにした。

しかし、残りの半年が大変だったな〜

何があつたて？色々あつたんすよ、色々とね……

「お兄ちゃん、これから転生するにあたって言わなければならないことがあります。」

真剣なときは口調も変わるんだよな〜 それとエミはちゃん付けはしないでくれます。何でだろう？

「もう、そんなの当たり前じゃないですか……」ボソボソ

「ん？どうした、エミ？」

「何でもありません。それで注意事項なんですが……一つ目、デバイスは転生したら送ります。」

今はデバイスなしでも プロテクトや防音結界ができるが…名前どっしよっかなー？

「二つ目、あつちではお兄ちゃんの両親は居ません」

うーん、そうか…まあ、こつちでエミと住んでて楽しかったからいいか！大変だったけど…

「三つ目、これが重要なんですが…これから転生する世界は8割か9割ぐらいに同じ世界です」

「つまり、どうなるの？」

「例え、お兄ちゃんが原作に介入しようとしても、しないとしても、必ずイレギュラーが起こるのです」

「そこは原作に介入しないといけないのか？」

「お兄ちゃんの思うがままに進んでください♪」

うーん…今は考えなくていいか？

「以上で説明終了です。 後、これはプレゼントだよ♪お兄ちゃん♪」

すると、エミの手から光の玉がフワリと浮いて俺の身体に入ってきた。

「エミ？何を入れたんだ？」

「ふっふーん。アレはポケ○ンの特性の『ふくつのこころ』を魔改造した代物…その名も……『不屈の魂』だよ!!」

「おい、待てや!! 高町 なのはのデバイスって確か『レイジングハート』だったよな!!  
いいのかそれって!!」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。所詮ソウルとハートの違いだから」

いいの……かな？

「はあく分かった分かった…ありがとな、プレゼント」

「うん、どういたしまして、お兄ちゃん／／／」

「やっぱし、笑った顔がいいなエミは……」

「あつ、ありがとう……／＼／＼」

「……それじゃあ……行くよ……」

「……うん……」

青年は扉に向かって歩き出す……少女の悲しみの笑顔を背に……

これから始まるのは第二の人生……未知なる世界……

青年はそこで何を……護り……闘い……得て……失うのか……

青年……否、聖道 流波は……ただ……真っ直ぐに……扉に向かって……歩み出すだけなのだか  
ら……

魔法と少女と波導使いと……

イマ…マジマル…

って、簡単に終わらしてくれないよな

どうせこの後エミが用意した落とし穴があつて、そこに落ちたら転生完了くということだろう。

ここは大人なお兄さんのポジションな俺の優しさでわざと、わ・ぎ・と引つかかつてあげようではないか！重要なことは二回言ったぞ！

さあ、何処からでもかかってきなさい！エミ・トラップよ！俺はどんなタイミングで落ちようとも驚かn『ガシイ!!!』い……ん？

右足を掴まれた感覚がしたので目を向けると……



転生

完了……

くくエミサイドくく

「行っちゃったなく私の…お兄<sup>実</sup>ちゃん<sup>兄</sup>は…

初めてあったときは緊張と照れ隠しであんな喋り方になっちゃったけど、そんなことがあっても優しかったなく…それに…イイコトもしてくれたし…／／／

「さてと、あつちに送るものを設定しないとね…」

カタカタカタカタカタカタ……

「うーん、人体のスペックは普通の人だと耐えられないから……アノ血筋をちよつと目な  
どに影響がでないように混ぜて……（サプライズとして秘密にしようかな？）」

「よし、後はこれの場所を「行ったか……」うわあああー！！！！」ピイツ

「ああ、すまないなエミ！驚かしてしまって……」

「本当だよお父様！急に出てこないでよ！」

「これで、送信つと♪」

「で、お父様」

「何だ？」

「本当にお兄ちゃんの一部の記憶を封印して良かったのですか？」

「封印といっても一時的なものだ…それに…分かっていたらアヤツは自ら破滅を望んでしまうしな。だったらあちらでちゃんとした土台を作ってからでも良いだろう」

「そうですね……」

お兄ちゃんは心配しなくても大丈夫かな？あつ、でも多分お兄ちゃんモテてちゃうな？だつてあんなにカッコ良くてやさしいんだもん…しようがないかな？だつたら……

「お父様、私、お兄ちゃんと結婚するね♪」

「だ、ダメだ!!」兄妹で結婚なんてそんなn「イ・イ・ヨ・ネ☆」ハイ……………

それは人が作った法だけど、私には関係ない！

愛さえあれば関係ないよ！

さーてとつ、

ペロリッ♡

「逃がさないよ♪おにいちゃん♪」

神界のとある所には、orz になっている父親と…

ピンク色の小ぶりで張りのある唇に、艶かしく舌なめずりをしている少女だけだった

…  
…  
…